

平林盛得
相馬万里子
編

文机談

菊亭本・伏見宮本

古典文庫

平林盛得
相馬万里子 編

文机談

菊亭本・伏見宮本

古典文庫

昭和六十三年五月二十日印刷発行

非売品

編者

相馬 平林 盛徳
（さうま ひらばやし もり とく）

談机文

発行者

吉田 幸一

印刷者

白橋印刷所

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話（九一〇）二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

目次

菊亭本文机談

第一冊

卷一 序 隆円・尼・或人らの問答

卷二 藤原貞敏

文徳天皇

清和天皇

貞保親王

源脩

源高明

源博雅

三 四 五 六 七 八 九 十

源信明

六

源資通

七

藤原師実

七

源経信

七

第二冊

卷二

孝博流——宇治七郎博業

七

卷三

藤原通憲

九

藤原重通——中原有安——鴨長明

九

藤原師長

一〇

第三冊

卷三

尼・隆円の物語

一三

二条院

一〇

大宮実宗——後高倉院

一四

孝道女——讃岐

一四

孝道女 尾張内侍 一五三

卷四 西園寺公経 一五七

徳大寺公継 一六四

冷泉隆房 一七〇

二条定輔 一七〇

第四冊

卷四[※] 二条定輔―後鳥羽院 一七七

順徳院の御代―藤原孝時 一八〇

左衛門督法眼禅性 一八五

孝道流―後高倉院 一九〇

久我通光 二〇〇

徳大寺実基 二〇二

衣笠家良 二〇三

澄覚僧都 二〇三

八幡別当耀清……………二〇四

少輔大夫橘家季……………二〇四

藤原仲良……………二〇八

橘仲季……………二〇九

藤原孝敏……………二一〇

卷五 孝道子孫——尾張内侍……………二一四

播磨局……………二一八

藤原孝經……………二一九

孝經流——久我雅光・孝經女……………二二六

乘蓮……………二二七

孝孫……………二二九

第五冊

卷五 藤原孝時……………二三二

* 孝時流——今出川公相……………二三五

後深草院	二五九
花山院師繼	二六三
土御門通行	二六七
一条実経	二六八
藤原光俊	二七〇
藤原孝頼	二七一
藤原孝秀	二七二
刑部卿局	二七三
橘成季	二七三
藤原憲説	二七四
源盛基	二七四
藤原行重	二七五
盛基二女 弁	二七六
源高政	二七六

むすび

二七六

跋文

二七七

伏見宮本文机談

(一) 卷

卷二

藤原貞敏

二八三

清和天皇

二九一

貞保親王

二九二

源脩

二九四

源高明

二九六

源博雅

三〇四

源信明

三〇六

源資通

三〇八

藤原師実

三〇

源經信・同基綱

三一

花園左大臣有仁

三五

桂少輔信綱

三九

桂流——治部卿局・證盛・淨蓮・博玄

三〇

嵯峨供奉賢円

三七

院禪

三三

長慶・妻殿

三七

(二) 卷

卷二

藤原孝博

三九

孝博——孝定——孝道

三四

藤原博定——孝博

三四

解説

三五

凡 例

一、底本は、菊亭本は京都大学付属図書館蔵菊亭本五冊（函号菊フ12）を複製本（昭10刊）によって用い、伏見宮本は宮内庁書陵部蔵旧伏見宮楽書二卷（函号伏・932）に依った。

一、底本の変体仮名や異体字は原則として通行の文字に改めたが、漢字と仮名の別、仮名遣、見せけち、傍注等はできるだけ原本のままに示した。

一、仮名文であることを考慮して、読点、並列点を多く用いたほか、内容的に可能な個所では改行した。

一、「」により改丁を示した。（ ）は編者の付けた注である。また菊亭本巻二以降と伏見宮本ともに、「一、清和天皇は」というように一つ書で書き起す人物列伝風な形式をとっているのが、本書ではその人物名に「」を付けて、その章段の前に置いた、内容により長短はあるが、「一、」で始まる個所は原則と

して項目立した。そのほか内容によって編者が加えた項もある。目次で※印を付したのが、それである。なお菊亭本巻一は一つ書ではなく区切りがないので、内容上分けられる個所で、改行、行間をあける等の処置を施した。

一、底本は両本とも、本文の行間の上部に朱書による見出しが施されており、菊亭本では冒頭に詳細な標目を戴せる巻もあるが、この見出しと標目が必ずしも合致しないなど、これらには問題も含まれると思われるので、見出しはなるべく底本に近い形で、本文行間にゴチックの小字で置いた。この見出しおよび本文中に付けられている合点\は、底本両本とも朱筆であるが、煩瑣になるので朱筆を区別する記号は省略した。菊亭本では処々に藍、褐紙の小片が貼付されているがこれも省略した。

一、解説でもふれたが、菊亭本の第四冊第二丁目に綴込まれている手鑑の逸文は、第五冊第一四丁の後に続くものと考えられ、また伏見宮本では(一)巻の欠部、第三紙とみられる部分が紙焼写真で存在するので、ともに繙読の便を考え、本書では該当個所にいれておいた。

文机談

菊亭本

京都大学付属図書館蔵

（第一冊）

（原表紙 外題ナシ）

〔序 隆円・尼・或人らの問答〕

（前欠）

とこそおほゆれ、奥洲の貞任十二年まで朝貢をおさへて□ □ なしけるには、かの頼光のあとをおほしめしいてられてこそ、頼義を□つかはしてついにほろほされにしか、その時の事そかし、天皇ことに御禊きひ。しくありて、いしの壇にて御拝せさせ給けるに、内侍をめして御厨子なる水竜といふ御ふゑめしよせて、安城楽三反をあそはして、きたの方に御たむけのありけるは、王城の鎮守賀茂の明神に御いのり申させ給なりけり、この曲はみやこやすしといふよみのあるによりて

なり、ほとなく貞任かくひを、源頼義の朝臣さゝけもちてまいりにければ、叡感ありて丹波の国に庄を立て給はせける、頼義、件の庄に貞任か頭をうつみて、やかてうつの庄とそ号ける、埋頭とかきたるとかや、朝敵ついたうの勲功の地なりければ、子々孫々につたへらる、かまぐらの右大将家までは五代と申へきやらん、その御時「オ文学上人と申けるひしりに御契約のむねありて、高雄の神護寺によせられにけり、かゝるためしとも侍也といふ

僧のいはく、その水竜のしさいしり給へりや、かの御笛は天曆の御時の重宝なり、帝これを秘してたやすく宴会にもちゐす、知足院殿の仰ありけるは、冷泉院の御邪氣の時、御硯の刀をもて哥の穴をゑらせ